

3つの嘘

東京都町田市立鶴川第二中学校三年 小野 礼佳

私は幼い頃から、おじいちゃんが大好きで、帰省すると片時も離れなかった。だから、おじいちゃんの事なら大体知っている。そんな気になっていた。おじいちゃんがついた三つの嘘も知らずに――。

新潟に帰省すると必ず出る定番メニューがある。

「ピーマンの肉詰め」だ。姉の好物である。一方、私の苦手な食べ物でもあった。料理が出ると顔を歪ませる私に気づいて、おじいちゃんはこっそり私のピーマンを口に運び親指を立ててくれた。

「ありがとう。」
と伝えると、

「おじいちゃんの好物だから、お互いにとって得だよ。」

と私の頭に二回手を置いた。それから、おじいちゃんのお皿にピーマンをのせると、おじいちゃんは喜んで食べてくれた。ピーマンが好き。これが私につ

いた一つ目の嘘である。この嘘に気づくのは、小学生高学年のこと。おばあちゃんがポロツと口に一言だった。家にある畑になぜピーマンを植えないのか尋ねると、当然のように、

「なんだって、じいさまピーマン苦手でしょ。」

と言った。嘘に気づいた私はなぜそのような嘘をついたのか疑問に思った。

二つ目の嘘は、

「眠くないから大丈夫。」

と言って、夜十二時まで私といってくれた時に言ったこのセリフだ。幼少期から喧嘩の多い私と姉は、おじいちゃん家でも些細な事から喧嘩をした。だが、三才上の姉に勝てる訳もなく、いじけておじいちゃんの部屋で泣いた。そんな私の味方はいつもおじいちゃんだった。泣き止むまで愚痴を聞いてくれたし、泣き疲れて眠ってしまった時も腰の状態が良くない

にも関わらず、おんぶして私を布団まで運んでくれ、欠伸をしながら私の話を聞いてくれた。普段は九時頃に寝ているのに嘘をついて私が寝るまで隣に居てくれた。嘘だっけ分かっていながら甘えていた事に、私は申し訳ないと思った。

コロナ禍になると、新潟への帰省が難しくなり、会う機会が減った。行けそうにないと電話で伝える母の姿を何回も見た。私が悲しそうに電話するとおじいちゃんは、

「またいつか会えるから大丈夫。まだまだおじいちゃん元気だから。」

と電話越しに言った。これがおじいちゃんが私に聞いた三つ目の嘘だ。その電話をして、少し経った後、母とおじいちゃんの三ヵ月後には立つこともままならないかもしれないという会話が耳に飛び込んできた。悲しくて涙が溢れた。そして、私は嘘をつくことを決意した。おじいちゃんの病気の事について、何も知らないという嘘だ。

おじいちゃんが私についた三つの嘘は、とても温かく、私を思ってくれた嘘だった。おじいちゃんと私に残された時間は残りわずかだけれど、おじいちゃんと一緒に良い思い出を作っていきたい。

大好きなおじいちゃんの人生が、少しでも長く続くこと、悔いなく過ごせることを、私は日々神にお願いしている。

